◉タコシェ店主、中山亜弓が選ぶ

森繁久彌の本

最後の森繁チャイルドの責任をまっとうするために

文●中山亜弓

なかやま・あゆみ●東京・中野の自主制作の本やCD、アート作品などを扱う書店・タコシェ店主。版元ドットコムにて、本の紹介もしている

●中山さんのお店……TACOché（タコシェ）
東京都中野区中野5-52-15中野ブロードウェイ3F　tel 03(3343)3010
営業時間　12:00～20:00（年中無休）　最寄り駅…JR・地下鉄東西線　中野駅徒歩四分。
タコシェURL　http://www.tacoche.com/

森繁久彌、言わずと知れた現役最長老の大スターである。

にもかかわらず、古くは、森繁の手記を代筆した竹中労を著作権侵害で訴え、逆に竹中からスターの名声と権威をカサにきた振る舞いを告発され俳優協会会長の座から追い落とされ、最近も辛口の論客であるナンシー関から日本アカデミー賞授賞式に出席するたびに枯れてゆく様をネタにされるなど、偉大でありながら、日本一トリビュートされにくい存在である。

しかし、森繁は森繁、現存する最古（？）の国民的スターである。そこで、映画「社長シリーズ」や「駅前シリーズ」を見て育った森繁チャイルドとして、同時代に生きる巡り合わせをがっぷり受け止め、その著作をひもとき、森繁節をじっくり味わってみよう。

『こじき袋』

読売新聞社・一九五七

いきなりNGなタイトルも、昭和三二年（一九五七年）という戦後間もない時代ゆえの初著作。役者・森繁は、職業柄、人間観察に余念がなく、人の喜怒哀楽はもとより、ふと垣間見た愚かさや虚勢、あるいは健気さや気高さを記憶にやきつけ、それらを引っ張り出しては演技に役立てる。そんな役者の知恵袋を、拾ったものの一切合切を放り込んで持ち歩くズタ袋＝こじき袋と称して披露。

ペット談義となれば、飼い猫のことを「客間のソファーなど囓って台無しにする始末は許しがたく、ジュウタンの片隅をトイレと間違え、酒も飲まぬのに所かまわずこまものを時に出すし、せっかくだが猫一族一同には先日集団疎開していただいた（留守中、ひとまとめにして捨ててもらったのである）。」という、犬猫が人間の僕であった時代というか、父親絶対主義ぶりを見せつける。

当時はまだタレントの好感度アンケートがなかったのかもしれません。

『見て来た・こんな・ヨーロッパ』

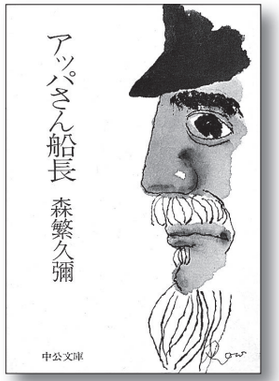
雪華社・一九六一

昭和三五年秋、森繁はテレビ映画「森繁の世界漫遊・ヨーロッパ編」取材のため、親類縁者二〇〇人に見送られて羽田を発つ。外国に行くことが、そんな一大事だった頃のヨーロッパ見聞記。とうぜん森繁も日本代表の意気で、各地の名所を訪ね、

こじき袋
著●森繁久彌
発行●中公文庫
ISBN4-12-200739-9 ／ 294円(税込)
文庫判／ 224頁
(初版●読売新聞社／ 1957)

見て来た・こんな・ヨーロッパ
著●森繁久彌
発行●中公文庫
ISBN4-12-201949-4 ／ 480円(税込)
文庫判／ 224頁
(初版●雪華社／ 1961)

読者をガイドする。大名旅行はたまた社長漫遊記を地でゆく旅行記。



アッパさん船長
著●森繁久彌
発行●中公文庫
ISBN4-12-200554-X ／価格不明
文庫判／237頁
（初版●中央公論社／1961）

『アッパさん船長』

中央公論社・一九六一

石原慎太郎の仲介でヨットを購入した森繁は、ベテランクルーと息子二人を引き連れ、横浜〜西宮の初航海に出る。世間の目の及ばない海の上で一人の男に戻り、父としてサバイバルな雄姿を息子たちに示し、日々逞しさを増す息子たちに目を細める森繁。妻と娘は陸路でヨットを追い、港ごとに落ち合っては家族の絆を確かめるクルージング型ホームドラマ「メイ・キッス号の船長」。

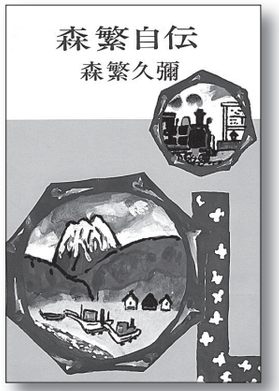
その後、森繁のヨット熱はエスカレートし、昭和三七年（一九六二年）、世界一周も可能な大型外洋帆船の建造に着手する。

借金まみれになりながら一年がかりで「ふじやま丸」を完成させ、進水式には皇族や大臣まで招き管弦楽団の演奏でもてなすという栄華の絶頂を味わう。直後、大阪で舞台に立った森繁は、「ふじやま丸」を西宮に繋留する。ところが、公演期間中のある夜、台風が港を通過することを心配した森繁夫妻は船に泊まる。風雨のすさまじさに目覚めた時には、船は木の葉のように嵐に揉まれ座礁。

船を捨て、救命ボートで海に降りた夫妻は荒波に飲まれ海の藻屑となりかける。

妻を必至で掴みながら波間でもがく森繁は奇跡的に波止場に打ち上げられ、這うようにして埠頭事務所に辿りつくのだが、荒海に目を向けると、両親を助けようと後を追って飛び込んだ息子が荒波に弄ばれていた…。

行き過ぎた道楽を戒め、自然の猛威を忘れぬよう教訓として書き残した「〝死〟の波濤の中で」。命がけの脱出劇はドラマ以上に劇的。



森繁自伝
著●森繁久彌
発行●中公文庫
ISBN4-12-204184-8 ／ 800円＋税
文庫判／頁数不明
（初版●中央公論社／1962）

『森繁自伝』

中央公論社・一九六二

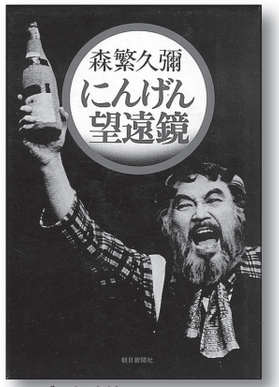
昭和三七年（一九六二年）、森繁五〇才の自伝。幼くして父を失いながらも、その遺産でぼんぼんな少年時代を過ごし、大正リベラリズムの勢いか演劇青年となり大学を中退してしまった森繁。虎の子の父の遺産も株で失い、心機一転、NHKのアナウンサーとして満州の地に赴くも敗戦。引き揚げて闇屋となるが、菊田一夫に拾われ再び芝居の世界へ。三〇才を過ぎて妻子を抱えての再スタートに、二枚目でも三枚目でもない独自の路線を戦略的かつしたたかに演じ、映画スターの座を築くまでの、高度経済成長に重なる〝ギラギラ〟した役者人生を振り返る。人生五〇年で著した自伝が、まさかまだ折り返し点であったとは、まさか当時の森繁は思いもよらなかったであろう…。

わたしの自由席
著●森繁久彌
発行●中公文庫
ISBN4-12-200671-6 ／ 320円＋税
文庫判／273頁
（初版●大学書房／1976）

『わたしの自由席』

大学書房・一九七六

報知新聞に連載された四〇〇字コラムをまとめたもの。文字数の少なさもあって、主張はストレート。「チューインガムは女に似ている。（中略）口にいれると（つまり交わると）、五、六回はかんで味もあるが、もうは捨てて見たまえ、うらみに狂ったチューインガム女は、ときには頭の毛や、洋服、じゅうたんについて、めったなことでは取れない。」と、当時のウーマンリブが卒倒しそうな喩えをぶったかと思えば、「たった三匹の精子を人間に変えただけで、あとは天文学的な数字ほどのザーメンをたれ流し、クシャくほどの楽しさしかなかったことか」と人生を嘆き、「一杯のコーヒーで恋が生まれ、別れ話をし、何千万の取り引きに成功し、失敗する。コーヒーとは効否（こーひ）の意か」と駄洒落で落とす。酒を片手に、居酒屋でほろ酔いオヤジの放言を聞く気分で読むもよし。

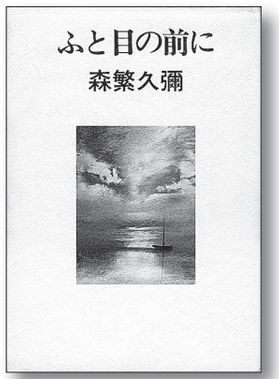


にんげん望遠鏡
著●森繁久彌
発行●朝日新聞社
ISBN不明／ 1300円＋税
四六判／ 371頁／ 1979-10-30

『にんげん望遠鏡』

朝日新聞社・一九七九

『屋根の上のヴァイオリン弾き』が初演から一〇年以上を経て、その評価を不動のものとした頃のエッセイ。「森繁ちゃん」呼ばわりする生意気だけどかわいい新進女優・桃井かおり、一方的に呼びつけておいてカメラテストなしのぶっつけ本番で「心を撮る」という、細心にして大胆、おそるべき勝新太郎…といった俳優たちの話、役者や演技に対する苦言、ヨット談義、座長芝居や舞台の喜怒哀楽、活動屋たちのエピソード、税金に対する不満、とヴァラエティに富んだ話題がつめこまれた森繁エッセイの白眉。



ふと目の前に
著●森繁久彌
発行●東京新聞出版局
ISBN4-8083-0221-7 ／ 900円＋税
四六判／ 229頁／ 1984-12-22

『ふと目の前に』

東京新聞出版局・一九八四

NHKのアナウンサー試験に受かり、高飛び気分で満州勤務に赴いたはいいが日本は敗戦。引き揚げの際には、押し入ってきたソ連兵から背中に根性焼きを入れられたり、三〇分もこめかみに銃口をつきつけられながらも、なだめすかして九死に一生を得た森繁。その後、満州に留まり、引き揚げ者たちを保護

し船に送り込む収容所の職員として働くことを決意。大挙して押し寄せる引き揚げ者たちを円滑に運送してもらうべく、蒋介石軍や鉄道司令所へ慰問団を連れてご機嫌伺いに。ときに歌手や踊り子の女性を所望されると、万が一に備えて極秘に集めた挺身隊に森繁が説得し出向いてもらう。なかには軍人の未亡人もいて、「主人も祖国のために命を捧げました。私もこの身で尽くせることがあれば」と引き受けた様子を、やるせない思いとともに告白。郷愁をもって、広大な大地と大らかな満人気質を語ると同時に、齢七〇を超え、戦争の悲惨さの語り部的な口調に変化した森繁節に注目。

『青春の地はるか——五十年目の旧満州への旅』

日本放送出版協会・一九九六

NHKの番組で五〇年ぶりに、旧満州の地を踏んだ森繁。杖をつきながら街を歩き、悪路をスタッフに支えられ、かつての住まい、職場、国境付近を行く。そして最後に、終戦を目前にして、同じ満州にいながら助け出すことがかなわず、一人逝った兄の終焉の地・延吉に自分の代わりに息子を向かわせ供養を済ませ、大陸に沈む夕陽に涙する…。

中国と中国人のスケールの大きさ、山田耕筰、甘粕正彦との思い出、ソ連兵によって身ぐるみ剥がされたり、命を狙われた危険なエピソード、ようやく叶った兄が眠る大地への墓参…と、森繁満州ものの集大成。

『もう一度逢いたい』

朝日新聞社・二九九七

八〇才を過ぎた森繁が、恩師・菊田一夫、女手ひとつで森繁兄弟を育て上げた母、出演作品の原作者でもあった谷崎潤一郎、憎からず思いながら男女の関係になることのなかった越路吹雪、初恋の人など、思いを寄せる物故者たちについて綴った書き下ろしで、亡き妻、杏子さんに捧げられている。とはいうものの、妻が旅立って久しいためか、八〇過ぎという時効人生ゆえにか、ある種の色懺悔？も含まれており、複雑な気分。

それは、なにも、一家をなした人物や老人の艶聞に接して戸惑うのとはちょっと違う。たとえば、後輩女優の大病について書かれた部分「彼女は大出世したが、どこか下のほうに癌ができたという。大変な手術だったらしい。彼女らしく、〝これで清々したわ〟と例の明るい笑顔を見せたに違いない。もう子供も大きくなったし、ご亭主には気の毒だが、そんな複雑なところは不要なんだと諦めて、少々ぶかぶかでも（よく知らないが）我慢してもらうより仕方ないだろう。」と言ってしまえる神経で書かれた、色っぽい話に対する居心地悪さかと思う。

自分の色恋について語るというのは、その人の品性や人生が出てしまう、話術だけではいかんともし難いテーマなのですね。

近頃、芸人やタレントが女遍歴あるいは男遍歴、下半身事情をあけすけに語る、切り売りが盛んですが、これとて体当たり芸ではすまない、才能が必要なのでしょう。色恋がうまく語れるようになれば、人生も達人の域に入るのでしょう。

『大遺言書』『今さらながら　大遺言書』『生きていりゃこそ』

新潮社・二〇〇五

「週刊新潮」に連載されている、久世光彦による聞き書き。当初は、久世が森繁から話を聞き出してまとめていたが、回を重ねるにつれ、森繁の老化も進み、森繁がそこはかとなく漂えば〇Kな、殆ど久世光彦のエッセイと化した、それでも森繁の語りとされる、語りを超えた新しい語り！

どうやら、取材中でも森繁がレム状態に入ったりするため、久世はネタを収集できずに空手で帰らざるを得ないこともあるようだが、家人から森繁の献立記録を入手したり、言動を聞くなど、あの手この手で森繁を構成する。

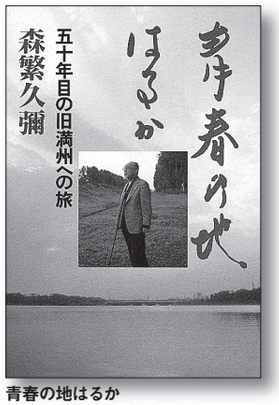
森繁が、とか、久世が、というより、森繁と久世の関係が作り出す不思議系テクストでそこから学ぶべき点は多い。

●相方が仕事をしないとき、いかに相方の立場を傷つけずにその事実を明白にしてエクスキューズを行うか。

●何を訊いても「大したことじゃない」という森繁を「決して投げやりになっている」のでない、とフォローすることで困りようを伝えつつ、さらに「暢気になったのだ」と森繁を異次元に昇華する二段構えのフォローが有効。

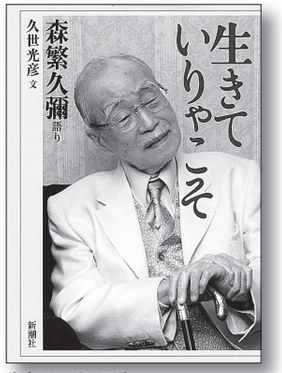
●森繁のみならず、家族や付き人の懐に長く深く飛び込み、その証言を借りて森繁を描くことで、かつて森繁自伝で語られなかったサイド（家族への暴君ぶりや浮気問題…）にまで光をあて、森繁アーカイブを微修正している事実！　究極の潜入取材。

これら久世メソッドは、年配の方、上司や会社のお局、舅や姑らとつき合ってゆくうえで大いに役立ちそうである。今後の人生のために大いに参考にしたい。



青春の地はるか
——五十年目の旧満州への旅
著●森繁久彌
発行●日本放送出版協会
ISBN4-14-005254-6 ／ 1553円＋税
四六判／ 197頁／ 1996-11-10

もう一度逢いたい
著●森繁久彌
発行●朝日新聞社
ISBN4-02-257068-7 ／ 1300円＋税
判型不明／ 214頁／ 1997-03-25



生きていりゃこそ
著●語り／森繁久彌、文／久世光彦
発行●新潮社
ISBN4-10-354505-4 ／ 1500円＋税
四六判／ 312頁／ 2005-05-20